

左利きで生まれて

三股町立三股中学校一年

大浦 勇飛 さん

僕は、左利きです。そのことに、何の違和感もなく過ごしてきましたが、小学校入学前に母が左利きだと苦勞することがでてるからと思い、左利きを直そうと右手ではさみを使わせたり、右手で箸を使わせたり、右手で字を書いたりする練習などを毎日させてたそうです。その中でも文字に関しては、まだ利き手でもうまく書けないのに利き手ではないほうで書くのをすごくいやがっていたそうです。母は僕に苦勞してほしくないからと思ってやらせていましたが、正直僕はそのこと自体に苦勞を感じていました。

そして、その年の四月小学校に入学しました。学校には母もいないので、左手で文字を書いていました。その後、母と担任の先生が話をする機会があったそうです。そのとき僕が学校では左手で文字を書いていることを担任の先生から母に伝えられたそうです。そのとき母は初めて左利きで苦勞するだろうと右手で書かせていたことが僕にとっての苦勞だったのだと気づいたそうです。

なぜ人間には右利きと左利きがあるのでしょうか。

左利きになる理由は、今もはっきりとは分かっていないけど、もともとの脳の作りには違いがあるそうです。それと色々な説があります。ひとつは利き手が決まる、三〜四歳ぐらいのときに左手を使うことが多かった子どもは左利きになるのではないかという環境説です。もうひとつは胎内での成長過程もしくは出産時に何らかの原因で左脳を圧迫する事態が発生し、その左脳のはたらきを補うために右脳が活発になって左利きになるという説もあるそうです。しかし、はっきりとは分かっていないのでどれが正しいのか分からないけれど、こういう説があるそうです。つまり利き手を強制で直すのは難しいということです。

そもそも、母はなぜ左利きは苦勞すると思ったのでしょうか。実際、割合でいくと九対一で圧倒的に右利きの方が多く周りの物も右利き用に作られているのがほとんどです。例えば、はさみや包丁などの刃物やパソコンのマウスなどたくさんあります。だから左利きは学校生活でも、社会に出ても不便で苦勞すると母は考えたのかなと思いました。実際、普通のはさみでは左手で切れません。だから、左利き用のはさみを購入したこともあります。

しかし、ドアノブや自動販売機などの公共の物は左利き用にはかえられないので、僕はそれに対応してきたので左利きであることを不便に思ったことはありません。むしろ得したことが多いです。例えば、今僕が部活でしている卓球では、左利きの人はいつも右利きの人としているので大会で右の人と当たっても慣れてるから、普通にできます。しかし、右利きの人は普段左利きの人と練習をしていないことから、左利きの人と当たったときに慣れていないのでやりにくいと思います。だから左利きの人は右利きの人と比べて有利だと思います。野球では左バッターのほうが右バッターの人に比べて一塁が近いので、打ったらすぐ一塁に走れます。だから野球でも有利です。ということは左利きの人はスポーツ界では有利ということです。

しかし、まだまだ社会では左手でご飯を食べるのは、行儀が悪いとか、左利きは不便でかわいそうと思ってる方がいるのも事実です。

実際は、左手は行儀が悪いという思いは右利きの人の勝手な思いにすぎないと思います。人と違うことは特別なことではありません。左利きだけではなく世の中には手や足が不自由であったり、目や耳が不自由であったりする人がいます。僕もその人達を見て「かわいそう」とか「大変だろうな」と思ってしまうことがあります。でも、自分が左利きであることにおきかえたら、確かに不自由な思いをしているかもしれないかもしれませんが、人と違うことはおかしいことでもかわいそうなどでもないことに気付かされました。

世の中、同じ境遇の人ばかりではありません。世の中が色々な人の存在に気付き、不自由な思いをせず過ごしていける社会になっていけばいいなと思います。でも環境ばかりを整えることが解決につながるわけではないと思います。一番、変わっていかないといけないのは人の心だと思います。人々が人を思いやり、色々な人の気持ちに気付くことが大切だと思います。

僕も左利きであることに自信を持ち、人と違うことに胸を張って生きていきたいと思っています。

当たり前前の個性

宮崎市立赤江東中学校三年

松山 虎男 さん

「これ出来るか」

「あれ駄目って言われないか」

僕が何か新しいことを始めるときは、こう考えるようになりました。

家族や病院の先生に、自分が出来ること、出来ると思うことでも、足のことを考えて、やってはいけないこと、出来ないことがあると言われています。不自由だなと思うことはあっても、僕にとっては、これが小さい頃からの当たり前前の僕の足です。

僕は、生まれつき足に障がいをもっています。一才から装具をつけています。この装具は、僕にとってはすごく嫌な物です。着けているだけで、いつでも、どこでも、たくさん人の目を感じてしまうからです。必要だとわかっているけど、慣れることはありません。「障がい者のへせい」、「ロボットの足」、「障がいがあっても可哀相」今までいろいろなことを言われてきました。でも不自由なことであっても、可哀相ではありません。装具をつけていることで、人を傷つけたりしていません。障がいをもっているから、特別扱いしてほしいわけではありません。今まで、自分のことを不幸だと思ったことは一度もないんです。

今年、戦後七十年です。戦争について調べてみました。原爆のこと、特攻隊のこと、疎開や戦時中の暮らし、そして、その頃の障がいをもっている人達のこと。障がいをもつ人はたくさんいました。

「体の不自由な人間は、武器を持って戦うことが出来ないから、生きつづける必要ない」

「兵隊になれないのは人間じゃない」

と、国のために働くことが出来ない人は差別を受けたり、障がいのある子供は、学童疎開から取り残されることもありました。

「障がい者はじゃまだ」

「障がい者はほっとけ」

今と同じように差別がありました。でも、僕の想像する何倍も辛い、くやししい体験だったと思います。

今でも、世界では戦争やテロ、内戦がおきています。その戦いが激しくなればなるほど、負傷し障がいをもつ人は増えてしまいます。戦争は、人権をうばうとても恐ろしいものだと思います。

差別もなくなっています。そして、今後もなくなることはないと思います。差別とは、「ある基準に基づいて差をつけて区別すること。扱いの違いをつけること。偏見や先入観などをもち、特定の人々に対して不利益、不平等な扱いをすること」とあります。人は、自分と違うということがとても重要なことで、その違いが差別やいじめにつながるっていくんだと思います。僕も、見た目や考え方が自分と違うということだけで、人に嫌な思いをさせているかもしれない。無意識に傷つけているかもしれない。そうならないでほしいと強く思いました。

人の意識は簡単には変えられません。だからまず、自分が自分のことを一番に理解すること、一人一人個性があって、人と違うのは当たり前、という意識をもつことが大切なんだと思います。

日本の障がい者の数は、七百八十七万九千人。十六人に一人が障がいをもっていることになりました。障がい者は、人よりもおとる存在と思う人もいるかもしれませんが。しかし、障がいを持ちながら、いろいろな分野で活やくしている人達がたくさんいます。陸上選手のウサインボルト、書家の金澤翔子さん、ピアニストの辻井伸行さん。障がいは関係なく、一人の人間として結果を残しています。不自由な分の努力は大きいんだろっかなと思います。

僕は、やる前から出来るわけない、と決めつけて色々なことから逃げてきました。それは、自分にしか出来ないこと、を見つけないチャンスを逃していたのかもしれない。これからは、やってみないとわからない、という思いでいろいろなことにチャレンジしようと思います。

自分のことをよく理解し、強い気持ちをもつこと。そして、無関心にならないことが人権を守ることにつながるんじゃないかと思います。

心の壁

都城市立妻ヶ丘中学校二年

白井文さん

余計なお世話だったんじゃないだろうか、声をかけて迷惑だったんじゃないだろうか、私は、エレベーターの中でずっと、考えていました。その時は、エレベーターの中一階に着くまでの時間がものすごく長く感じられました。ショッピングモールでエレベーターに乗ったときのことです、エレベーターの前に車いすの男の方が待っていらっしやいました。私はなにも考えずにその方の横をすり抜けてエレベーターに乗り込みました。そのあともおばさんが二人乗り込まれました。私はエレベーターの開くのボタンを押しながら、車いすの男の方が乗り込まれるのを待っていました。一向に乗られる様子がありません。私は「ごっご」と声を掛けました。するとその男の人は驚いたような顔をして、それから目を伏せて、ゆっくり車いすを動かしてエレベーターに乗り込まれました。エレベーターの中はシーンとしています。私は、いけないことをしたんだろうか、あの時一人で待たれていたのに、横をすり抜けて、先に乗った私のことを怒っているんだろうか。私の心は重く苦しくなりました、悪い思いばかりが頭に浮かびます。早く一階に着いてと願っていました。やっとエレベーターが一階に着いてほっとした私はそのままずっとエレベーターの開くのボタンを壁に顔を向けたまま押していました。女の方2人が降りられた後、私に車いすの男の方が「ありがとう。」とやさしく声をかけてくださいました。びっくりして振り返ると、その方は笑顔でゆっくりと車いすを動かしながら下りて行かれました。私はホッとしました。自分は迷惑な行動をとったわけではなかったんだ。やっと心が軽くなりました。と同時に行動する難しさも実感しました。この出来事を、夜、姉に話しました。姉は一つの昔話をしてくれました。それは姉が小学校の時のことです。学校の玄関で掃除をしているとボランティア交流会に参加されて面識があるAさんが階段が一段ある玄関入口で、入られずに困っていたそうです。「こんにちは。」と声を掛け、どんな用事ですかと聞きたかったけれど姉は話す方法がわからなかったそうです。Aさんは両足がなく、耳も聞こえず、話すこともできない多くの障害がある方だったのです。外は雨が降り始めています。早くどうにかして差し上げないと、雨がひどくなったらAさんが困る、手話もできない姉は焦ったそうです。母はAさんを見るとすぐにAさんの手を持って手のひらにゆっくり文字を書きました。「どうされましたか。」するとAさんが、カバンから印鑑を取り出されました。母とAさんは、話をするのができたのです。用が終わったAさんは、先生方が送りますと言つのを断って強くなった雨の中、車いすで帰っていかれたそうです。姉は、この出来事でいろいろ考えさせられたと言います。姉はAさんに対して、どう話しかけたらいいか悩んでいたのに、母は手話ができないのに簡単に話すことができた。どうしてなのか、姉は、心の中で、話しかけてもわからないだろう、会話するのは無理だと決めつけていたのかもしれないと思ったそうです。ボランティア交流会で「可哀想な人だと思わないでください。ちょっと変わっている人と思ってください。」といわれた意味がその時やっと姉にはわかった気がしたと言っていました。姉は言います、私は口で話すことができない、ろう者は手で話すことができます、違いはそれだけ、私は足で歩く、足が不自由な人は車いすで移動する、違いはそれだけ。心を伝えるには伝える手段が違っただけ心の壁をなくせば同じ立場で向き合うことができるんだよね。姉の話聞きながら、雨の中、濡れながら車いすで帰っていくAさんの強くてたくましい姿が目に見え、浮かびました。その姿は昼間あった車いすの男の人と重なりました。私も昔の姉のように、障害のある人に対して、大変だろうなど毎日の生活の不便さを思い気を使い、逆に、行動することを躊躇してしまいました。心に壁を作ってしまったのです。障害があるから大変だ、可哀想、そう思っていた自分がいました。障害を持っている人が不幸で、持っていない人が幸せ。これは思い上がりです。幸せか不幸せかは、自分自身が決めるものです、周りが決めるものではありません。私は、あの日、エレベーターでの出来事で、色々なことを考える機会を得ることができました。そして、姉の貴重な経験と考えを聞くこともできました。昔の母の行動にも驚かされました。母の行動や姉の考えを聞き二人を尊敬しました。そして自分も二人のように、なりたいたいと思いました。明日から、自分は考え過ぎることなく、困っている方を見かけたら、手を差し出す勇氣を持ちます。相手の心を理解することは難しいけれど、自分の心を伝えたい。分かり合ってくださいと思います。

四つ葉のクローバー

宮崎大学教育文化学部附属中学校三年

伊達 成美 さん

「周りのクローバーと葉っぱが違っている、四つ葉のクローバーを見つけたとき嬉しくなるでしょう、人間も同じだといひね。」

この言葉は、祖母から母へ、母から私へと教えられた言葉です。幼いころから、幾度か聞かされた言葉でしたが、あまりピンときませんでした。しかし、この夏、私は、その言葉の意味がわかる出会いがありました。

私が、二時間半ほどバスに揺られ、鹿児島県鹿屋市にあるハンセン病療養所「星塚敬愛園」を訪問したのは、八月の初め、雲一つない夏空の日でした。小高い丘の、青々とした緑が茂り、セミの合唱が聞こえるその場所は、とても、ゆったりとした時間が流れていました。お店や理髪店、郵便局や図書館、教会、浴場などがある「小さな町」に住んでいるのは、ハンセン病後遺症をもつ人々です。

二度ほど訪問している、看護学生の姉の勧めで訪問事業に参加したものの、正直、ハンセン病という病気のことについて、全くと言っていいほど知らず、ただ漠然と「怖い」、「うつる病気なのではないか」、そして、訪問して意味があるものなのだろうかと思っていました。

しかし、その「小さな町」に着いたとき、私の想像していた暗いイメージとは全く違い、そこで生活する元ハンセン病患者の方々は、にこやかな表情でした。

「暑い中、遠い所まで来てくださり、ありがとうございます。今日、来てくださるのを楽しみにしていました。私が経験したことは、隠さずにお話するから、何でも聞いてくださいね。そのかわり、外の世界を知らずに生活してきた私に、学校のことや色々な話を教えてくださいな。」

私に、ハンセン病について、教えてくださったのは、発病してから六十九年間もの間、療養所で生活されている、穏やかで丁寧に話されるNさんでした。

ハンセン病は「ライ病」と呼ばれ、その治療や、人につつらないという考えから、人里離れた療養所に隔離され、監視された療養所の中で、外に出ることは許されない生活を送っていたそうです。私は、強制隔離の現実や、また、子供を持つ権利や新しく生まれる命まで奪われていたと知り、とても驚きました。医学が進歩し療養所も徐々に改善されていきましたが、ライ予防法が廃止されたのは隔離が始まってから、約九十年も経っていました。その間、Nさんは、故郷に帰りたい、祭りが見たい、親兄弟に会いたいと思いつつも、だんだん病気を受け入れ、今では、この病気になって知ったこともたくさんあるし、こうして、訪問してくれた人とお話もでき、ありがたいと思うと話されました。穏やかな顔に刻まれたシワと、はにかんで照れたように笑うNさんは、長い時を経て、自分と真正面から向き合う、とても寛大な心の持ち主でした。その中で、このように自分の病気や、生活を受け入れるまでには辛いこともあったと話されました。Nさんが、まだ、療養所に来て間もない幼かった頃、園の門をぬけ、道路の脇に咲いているヨモギを摘んでいると、通りがかった仕事帰りの人から、

「なぜ出てきているのか、お前はその中に住む人で、こっちに住む人ではない。」

と罵声をあびさせられ、恐ろしい目で見つけられた時、何も悪いことはしていない、なぜ、同じ人間なのに差別を受けなければならぬのだらうと悲しかった、そして、ハンセン病に対する周りの思いがわかったそうです。現在ハンセン病は、免疫力の向上や衛生状態、栄養事情が良くなっているため、感染力が弱く、感染したとしても発病することは極めてまれであり、現在は治療法も確立されている病気と言われています。私も、療養所を訪問するまでは、病気のことを理解していませんでした。Nさんの話を聞いて、姉の、「自分の目で見て、正しいことを知るべきだ」と言った言葉の意味がわかりました。そして、祖母が母に、母が私に伝えた言葉の意味も理解できたのです。

人間は、同じ人間でありながらも、どこか違っていたり、個性を持った人に対し、偏見や差別をしたりする。ところがどうでしょう。四つ葉のクローバーは、周りのクローバーと葉っぱが違い、まわりと異なっている、見つけたときに「ラッキー。」と歓声をあげ、大切に本にはさんで押し花にしたり、幸せな気持ちになったりするのは、私は、私たち人間もそうありたい、そうなれたらなと思うのです。

Nさんとの別れ際、私が握手を求めると、

「私は幸せ者ね。」

と、Nさんは微笑みました。

Nさんとの出会いを、やわらかな手の感触を、これからも私は、忘れることはないでしょう。